

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 18 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02247

研究課題名(和文)近世文芸と医学に関する総合的研究

研究課題名(英文)General study on early modern times literary arts and medicine

研究代表者

吉丸 雄哉 (Yoshimaru, Katsuya)

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：10581514

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は医療および医学に関する近世文芸を対象とした。研究成果の一つ目は重要な資料の翻刻である。『当世医者風流解』初編・二編と『笑談医者質気』の翻刻と解題作成を行った。二つ目は文学作品の中での医者や医療関係の用例をジャンルごとに全集や事典や研究書を援用しつつ大規模に収集し、「医学関連作品年表」を作成したことである。三つ目は竹斎物を中心とした近世医学小説の紹介である。仮名草子『竹斎』とその影響を受けた作品を竹斎物と定義し、関係した13点について梗概を中心とした解題を記した。

研究成果の概要(英文)：This study intended for early modern times literary arts to be related to medical care and medicine. It is the reprint of the document that the first is important of results of research. I performed the "Tosei Isya Furige" first volume, two parts and a reprint and explanatory notes making of "Shodan Isya Katagi". The second collects the doctor in the literary work and medical care-related examples on a large scale while quoting the complete works and an encyclopedia and a monograph every genre and is to have made "Chronological table of early modern times literary arts and medicine". The third is an introduction of the medical novel in the early modern times around "Tikusai series". I defined story book in "Tikusai" and the affected work as "Tikusai series" and wrote down the explanatory notes mainly on the summary about 13 points related to.

研究分野：日本文学

キーワード：日本近世文学 江戸時代 年表 医学 医者 竹斎

1. 研究開始当初の背景

江戸時代の医療について、文学作品を通じて学ぶことが現代に役立つと考えた。江戸時代と現代日本の医療事情は大きく異なる。医者になるには免許が必要となり、高い水準の医学教育を受けたものだけが医者になった。国民皆保険となり、安価で高度な医療が受けられるようになった。薬は個々の医者が調合するものではなく、製薬会社が多額の研究費を投入して開発した薬が使われるようになった。そもそも個人の自己治癒力に働きかける要素が大きく、伝染病に対して効力の低かった東洋医学にかわって、実証的な西洋医学が主流となった。結果として、日本人の平均寿命は厚生労働省の発表によれば平成26年の時点で、男性 80.98 歳、女性 87.14 歳となった。52 で亡くなった井原西鶴が「浮世の月見過しにけり末二年」と詠んだ江戸時代は 50 歳の寿命を意識して人生計画を立てていたわけだが、それに比べて「浮世の月」が 30-40 年は見過ごせるようになったのである。

その一方で、生病老死の苦しみは、病気の多くが治療可能となり、寿命が延びても解消されたとは言いがたい。生まれた人間は必ずいつかは死ぬのである。現在よりも厳しい環境にさらされていた江戸時代の人たちの実存から学ぶところが多いのではないかと考えたのである。

江戸時代の医療に私が関心を持つ理由はもうひとつある。それは国民皆保険であり、医療の充実した日本と違って、江戸時代と同じように市場原理の働く国が少なくないからである。また、現在「医療」、「年金」、「福祉」、「介護」、「生活保護」につかわれている社会保障関係費が歳出の 33.3% をしめ、急激な高齢化は経済成長より支出の額を増大させ、制度的な見直しがかこれから何度も行われると予想するからである。黒澤明『赤ひげ』(1965)の世界がもう一度待っているのである。そのときに、市場原理的医療社会だった江戸時代を学ぶことで、対処の手がかりが得られるのではないかと考えている。

江戸時代の医学状況について学ぶことの重要性は決して認識されてこなかったわけではなく、史学において深く考察されている。文芸作品は作り物であって、正確な江戸時代の現実を伝えているわけではない。作品としての面白みを出すために修正や誇張が加えられたり、あるいはまったくの創造であったりする。しかし、有名無名の作者たちが描く、江戸時代での医療に通底する特徴を見いだすことは可能であり、また作意を分析することで江戸時代の人々のものの捉え方を知ることができると考えた。

以前に研究代表者は「東京医科歯科大学教養部研究紀要」第 39 号(2009)に「近世小説の中の医者」として、概説的な考察を発表した。

その後、「近世小説の中の医者」でもとり

あげた上田秋成について、関心を深め、医業の面から上田秋成の生涯および著述のとらえなおしを「秋成と医業」(東京大学国文学論集 5、2006)で行った。秋成にとって実業であった医業が一見して文事と関係が薄いように見えながらも、医学は科学であり、その運用には思想がとれない、実際には秋成の文事に強い影響があることを明らかにした。

以上のことから、近世文学と医学に関する研究の必要性を強く感じていた。

2. 研究の目的

本研究は基礎的研究として「医学関連作品年表」の作成を目的とした。仮名草子・浮世草子・談義本・黄表紙・噺本・落語を精査し、医者および医療行為が描かれた例を収集し、題名・作者・簡単な内容を記す。

研究代表者がかつて作成した『忍者文芸研究読本』『忍者関連主要作品年表』や以前の科学研究費補助金助成事業「滑稽本の総合的研究」における作品一覧と同様の趣旨である。その作成を最大の目標とする。

浮世草子『笑談医者質気』や滑稽本『当世医者風流解』初編・二編といった未翻刻ながら、医者が主人公となる重要作品は、翻刻することにした。

3. 研究の方法

「医学関連作品年表」の作成と竹斎物を中心とした近世医学小説の紹介は主要な全集本や研究書・研究論文、原本・影印・マイクロフィルム の閲覧により行った。

「書名」「該当箇所」「作者」「刊年(和暦)」「刊年(西暦)」「特徴」「翻刻の有無」「タグ」を基本項目とした。「影印」については利用しやすいもののみ記した。「タグ」は内容の目安となるよう内容と関係の深い語を選んだ。

「談義本・滑稽本の医療に関する箇所」は野田寿雄『日本近世小説史 談義本篇』が掲載する談義本・滑稽本を点検して、用例を収集した。

仮名草子と浮世草子の八文字屋本については仮名草子集成(東京堂出版)と八文字屋本全集(汲古書院)を用いて用例を収集した。八文字屋本全集は索引篇が存在するが、それに医療関係語の記載があっても些少な使用でしかない場合は収集対象とせず、目視での確認を重視した。年表項目の「該当箇所」に関して、仮名草子集成と八文字屋本全集のページ指定は該当話の始まりを記した。

黄表紙は主に棚橋正博『黄表紙総覧』の記述を参考にしながら用例を探した。一部、原本の確認できなかったものは『黄表紙総覧』の記述に従った。

「浮世草子大事典関係」は事典の該当ページを記した。浮世草子大事典関係の項目はあいうえお順で収集した。

翻刻作成のために、信頼できる底本を所蔵する公的機関に赴き、調査と影印の撮影を行

った。また、関係する和本を入手し、翻刻作成の資料として利用した。

4. 研究成果

研究成果は大きく三つに分けられる。

一つ目は文学作品の中での医者や医療関係の用例をジャンルごとに全集や事典や研究書を援用しつつ大規模に収集し、「医学関連作品年表」を作成したことである。仮名草子、八文字屋本、その他の浮世草子、談義本・滑稽本、黄表紙、噺本、落語について年代順に用例収集した。収集した用例の数は594にのぼり、近世文芸と医学の関係をj知る基礎資料として活用されるはずである。

二つ目は竹斎物を中心とした近世医学小説の紹介である。仮名草子『竹斎』とその影響を受けた作品を竹斎物と定義し、11点について梗概を中心とした解題を記した。加えて、重要な医学小説である『笑談医者質気』と『医者談義』の解題も加えた。これらの作品は言及されることが多いにもかかわらず、その内容を手短かに確認できない状況にあった。本成果により近世文芸の中の医学について、格段に論究しやすくなったはずである。

三つ目は重要な資料の翻刻である。『当世医者風流解』初編・二編と『笑談医者質気』の翻刻と解題作成を行った。これらは近世における医者および医学について重要な見方や知識を教えてくれる貴重な資料にもかかわらず、信頼のおける底本にもとづいた正確な翻刻や解題が存在しなかった。

『当世医者風流解』初編は、親も医者の厚釜敷安という男が医学修業のために田舎から上京し、そのころ人気の気転頓作先生から医道の奥義を習うという内容である。その奥義とはまともな治療の方法ではなく、弁舌により相手の気持ちを巧みに動かしてよい治療だったと思わせるやり方である。中本の会話体という明らかに滑稽本の様式であり序文でも膝栗毛を意識しているが、登場人物同士の会話のやりとりによって展開するのではなく、ほとんど気転頓作先生の一方的な講釈が並べ立てられ、また医療に関係なく、当世人の気質が昔から変化したことを指摘する箇所も多いので、書型ではなく内容を重視すれば、談義本や心学講釈本に似た部分も多い。初編は三巻からなるが、医療の方法を述べるのは中巻で、上巻はほぼすべて、下巻の前半は昔と今との人の気質の違いを述べている。下巻後半では、厚釜敷安が商家の娘を診察し、おはん長右衛門もどきで、妊娠したと見立てて大失敗して、加賀千代女に逆恨みをし、千代女から婦人療治の秘密を伝授される結末を迎える。

江戸時代医学小説では藪医者を描くのが通例で、本作もそのひとつである。下巻は生半可な医者による医療の失敗をおどけたふうを描くという、竹斎以来の伝統的な藪医者小説であるが、本作の主眼は医者が口先で患者の気持ちをいかに操作しているかを暴露

した中巻にあるだろう。談義本であれば、医者への批判が主であるが、本作は医者からの患者対策の種あかしである。示される話法がそのまま通用するとは思えないが、なんとなく医者に丸め込まれているとの実感は当時の患者にあって、そこが共感と呼んだのだろう。また、言いように従って納得してしまう人の心を巧みに描いており、普遍的な読み物としていまも古びない。

二編が翌年に刊行されたことや、後刷本や異版本があることから、よく読まれたと思われる。作者の横谷南海は詳細不明。医者が偽名をつかって書いたのかもしれないが、医者でなくとも執筆可能な内容である。作中の狂歌を詠んでいる四穂園金英、南陽館草陽、菘笠坊案山子らとの関係を見ると、どのような文化圏に所属しているのははっきりする。たとえば四穂園金英は『平安人物志』(文政十三年版)に登場する人物で、名を中川丈助といい、京都油小路竹山町北に住んでいた。「『平安人物志』掲載諸家関連短冊」解説によれば、本業両替支配人をつとめ、麦里房貞也社中で狂歌を作っている。ここから察するに横谷南海は小説の舞台の京都に住み、四穂園金英のその交友圏内にいた人物であろう。

二編上巻は気転頓作先生による講釈からはじまる。内容も医療よりも今昔の人の気質の違いを述べるところから入り、医者が患者に対してどのようなことを気にしているかを述べる。中巻も同じだが、上巻では欲面一芳、中巻では太田了竹と沼田蕪斎が師匠に異見をはさむ。中巻の途中からはまた古今の人の気質の違いに戻ってしまう。全体的に医療の話が少なく、ネタ切れの印象がある。巻末には予告がなされ三編を出す意志がうかがえるが未刊に終わったのもそのためだろう。しかしながら、初編・二編あわせて当時の医者の事情が見えてくる江戸時代の医者小説の秀作といえる。

研究成果に関しては、「三重大学日本語学文学」誌に翻刻を掲載したほか、報告書を作成し、残りすべてを収録した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

吉丸雄哉、翻刻 当世医者風流解二編、三重大学日本語学文学 28号、査読無、2017、19-42

吉丸雄哉、翻刻 当世医者風流解初編、三重大学日本語学文学 27号、査読無、2016、11-36

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 1件)

吉丸雄哉『近世文芸と医学に関する総合的

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉丸 雄哉 (YOSHIMARU, Katsuya)

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：10581514

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()